

六 讃岐の菊花石（ノーライト）

盆山に見るや四季咲く雪の花（よみ人知らず）盆石を愛する人々に格別賞翫されるものに菊花石がある。菊石、菊面石—とか菊目石ともいう。

「嬉遊笑覧」の石の部を見ると、

菊目石の花と植えてや雪の下（風鈴軒）

白き輪やそのまま菊目石の竹（定行）

などの句も載っている。

白いところが放射状に石面にあらわれて、恰も菊の花に似た紋様を美しく描いているのが、この石である。だから勿論、岩石そのものの名ではない。同じ菊花石、菊目石といっても、その産地によってみな石質は違っている。

菊花石で最も知られているのは美濃（岐阜県）の根尾谷産のものであろう。

この根尾谷産の中には、暗色の地肌に白や赤の大菊小菊の紋を鮮かに浮べている

実に見事なものもある。

この根尾谷のは暗色の輝緑凝灰岩の中に、白い方解石が白菊の輪になり、赤いところは瑪瑙が入り込んで、紅の菊花をあらわすという素晴らしいものまでがある。

また、出雲の松代の菊花石などは、白い菊花の円形の輪が、霰石（あられいし、方解石と同じ成分だが、形がちがった結晶の鉱物）で、できている。しかし、これらは岩石の中の造岩鉱物が、特殊な出現状態を示したものであるが、これと全く違って、生物の化石が菊花模様になったものもある。四国の土佐などから出る菊花石などがそれで、この地方のものはセラチテス（アンモナイト）という古生代の貝が、堆積岩である黒い粘板岩質の地肌には白い菊花の紋をあらわしている。

さて、讃岐の菊花石だが、それは化石ではなく造岩鉱物そのものの織りなした自然の妙石であって、遠く海上に離れた孤島―円上島がその産地である。

この島は、観音寺の海上凡そ二十キロ、―伊吹島からまだ西方約八キロ―の海上に孤立し、廻りは一・八キロ―という饅頭型の島である。島の西北部に突堤状

に突き出た岩頭がある。その岩頭に菊花石が露出している。これを最初に発見したのは、昭和五年の三月、時の九州大学教授高壮吉理学博士であった。

博士がこの岩頭に注目したのは、勿論菊花の紋様だったが、球状花崗岩といって白色の長石が円形を描いたものは愛知県で、閃緑岩（花崗岩に似て普通黒味を帯びたもの）の中で鉱物が同心円状に配列した球状閃緑岩などは福井、佐賀、宮城などでこれまでに知られているが、黒色の班れい岩、その造岩鉱物が球状組織になっているのは、これが初めてであったからなのだ。何分花崗岩の多い瀬戸内海沿岸、―ことに讃岐には珍しい岩石なのであった。しかもそれが、球状組織になっていた。

岩石を分類する場合、酸性岩類、中性岩類、塩基性岩類という区分がある。これは硅酸―つまり石英分の含有量の多少によって分けた分類で、素人向にいうなら、白っぽい岩石、―花崗岩のような岩は石英質が多いので酸性岩、安山岩などは中性岩―玄武岩のような黒いものは塩基性岩というわけで、いずれにしても

石英分が少ない岩石程黒っぽくなる。

班礪岩は、塩基性岩で黒く玄武岩と同質のものだが、玄武岩は地表で固まった岩なので、その造岩鉱物が目では識別出来ない。しかし、班礪岩は、玄武岩質マグマが、地下の深い所で高圧下で固った岩だから、その造岩鉱物である斜長石や輝石などの結晶が粗くて肉眼でも識別出来る黒っぽい岩石である。

さて、その班れい岩の中の斜長石だけが白く大きく目立って、それが丸く二重の同心円状に並んで菊花の紋を岩の一面に描き散らしていたので博士はこれを今までに見えなかったことのない球状ノーライトとして学界に発表した。

ノーライトというのは、班れい岩でも、その中の造岩鉱物の輝石が紫蘇輝石と違う種類のものに名づけたもので、その黒く見える班礪岩中の紫蘇輝石と斜長石の白色部が同心円状に並んで、菊花の紋を描き出しているものであった。

ともかく、学術的に珍らしいものなので間もなく、昭和九年に天然記念物に指定されてしまった。

しかし、長さ六メートル、幅にして約二メートルという露岩に美しい渦巻形に菊模様が、ちりばめられていたこの菊花石も、何分遠く離れた無人の小島であるので、記念物となっても、その管理が行き届かない。いつの間にもやら盗石も行なわれて、荒らされ、その陸面にあらわれたものは殆んどがなくなってしまうた。

行政区域は勿論観音寺市なので、市の教育委員会も、それには手を焼いている。伊吹島の漁民などに監視を依頼したこともあるが、無人島のこと、四六時中番をする監視人も置けない。沖に出て釣をする人や船人などに立寄られたらどうにもならない。荒らされ放題にもなる。「盗石は、その一塊でもよい、市はそれが欲しい」というわけであろう。「取った菊花石は返して欲しい」と再三再四、呼びかけの運動までしたこともある。しかし、一向にその効果もなく市へ寄贈する一もなかつたという。

それもそうであろう。天然記念物として指定されても、こんな有様で、円上島の菊花石は島の岩頭から、その美しい天然の姿を消しているのだ。

何分、小島のしかも、ごく一部の露頭だけで発見されたものなので、他の地方の菊花石のようにこれまでに、好事家の間に賞翫されていないので、この讃岐の菊花石は見ることも出来ない。岩片にあらわれる多くの菊花の紋様は、直径三糎から四糎、特に大きいもので七糎もあろうか、その花の縁は二重の斑紋になって、それが岩の一面にあらわれているので、奇観を呈した。菊花石なのだが、惜しい話である。